

南インドにおける有機農業と非有機農業の比較研究

平成 17 年入学

派遣先国：インド

派遣先機関：Wayanad Social Service Society(WSSS)

秋山 晶子

キーワード：有機農業, 南インドケーララ州

派遣先機関の概要

派遣先である Wayanad Social Service Society(WSSS)は、南インド、ケーララ州のワヤナッド県で活動している非営利、非政府組織である。小農民や貧困層の自立を目指して、教育支援、農村開発支援、女性支援などを行っている。中でも、環境事業と農民の自立促進事業を合わせた有機農業の普及活動に力を注いでおり、今回の派遣では、その有機農業の普及事業に参加させてもらうこととなった。

派遣先志望動機と、派遣前に設定した目標について



写真 1：有機農法の講習の様子

WSSS への訪問は、2005 年 11 月に続いて、2 度目となる。前回の訪問は、2 日間という非常に短い時間の滞在であったため、簡単な活動の紹介を受けるとともに、活動に参加している農民の数人と話し合うだけにとどまった。今回は、より長く滞在し、有機農業の導入が、農民たちの生活や自然観にどのような影響を及ぼしているか理解を深めようというのが目的である。

派遣期間中の活動について

最初にオリエンテーションと 3 日間の有機農法の講習を受けたのち、活動を展開している農村を 1 つずつ歩き回る事となった。このケーララ州ワヤナッド県は、胡椒を中心とする香辛料やコーヒーの産地である。今回滞在した 2 月には、胡椒の収穫期にあたり、どの農家からも、日干しにしている胡椒の香りが立ち込めてくる。

私が参加した有機農業のプログラムのねらいは、胡椒などの特産物に国際有機認証を取得させ、国際市場へ進出することにある。自分たちが口にす

る食の安全の確保というより、輸出用の換金作物に特化した有機農業である。しかし、最初の動機はなんであれ、化学投入



写真2：胡椒の収穫の様子

物を使えないことから、天候や病害虫との工夫に満ちた関わりをはじめ、農業そのものに楽しみと誇りを見いだしている農民達がいる。熱帯農業では特に難しい土壌管理に独自の方法を発見したと話してくれる農民の顔からは、インドの農民から連想されがちな貧困、搾取、といった要素は伺えない。しかしその一方で、利潤追求に留まっている農民も多く、自給用の作物には相変わらず農薬を使っていたりもする。安易な理想化は許されない側面もあるのである。

インターンシップを通じて、規模やカースト、そして農業に対する考え方の異なる54件の農家を訪問した。利潤だけに留まらないより豊かな農業を考える入口となる大変貴重な1か月であった。

派遣先で印象に残った体験や経験

農民を訪ね歩いていると、さまざまな食べものを御馳走になることが多い。その中でも最も印象的だったのが、タピオカ(キヤッサバ)と一緒に食べた魚カレーである。農民とともに収穫作業を行った日、取り立てのタピオカをゆでたものと香辛料のきいた魚のカレーを食べさせてもらった。これは、文句無しに最高の組み合わせである。何より、炎天下の中、一緒に汗を流してタピオカを掘り起こし、また一緒に調理したカレー。こういった農作業と調理、さらには新鮮な食べ物の味見といった、まさに五感をフルに使った調査は、農業研究を行う醍醐味である。

目標の達成度や反省点について

今回の派遣では、まずはできる限り多くの農民から話を聞き、この地域の農業の現状を把握しようということに努めた。約1か月の間に8つの村に訪問し、この点はほぼ達成できたといえる。しかし、全貌をつかむことに多くの時間を割いてしまったため、農民個々人の状況を密接に観察するには至らなかった。次回は、1つか2つの農村に的を絞って、より腰を据えた調査ができることを期待するのである。



写真3：農場の風景